

人生を変えた2年間

JICAボランティア ビフォー／アフター 80

BEFORE → AFTER



小沼大地さん
(シリア・環境教育・H16年度3次隊)

文=大石美穂 Text by Miho Oishi

中学・高校と部活動で野球に明け暮れていた小沼大地さんに転機が訪れたのは、受験を控えた高校3年生のころ。たまたま読んだ社会学の専門書で「世界にはいろいろな価値観がある。あなたの価値観はほかの場所では通用しないこともある」という一文に出合い、愕然とした。

「世界にはさまざまな価値観を持つ人たちがそれぞれの生活様式で生きていることを知り、異文化への興味が出てきました。異文化を知ったうえで人生を歩んでいきたいと思い、大学では社会学を専攻し、休みにはバックパッカーとして途上国を歩き回っていました」

経営コンサルタントによって、NGOの運営状況や職員間のコミュニケーションが改善されていくのを目の当たりにした小沼さんは、「ビジネスと社会的な活動を結びつける仕事が見たい」と考えるようになった。ただ、そうした仕事をするには、まずはビジネススキルを身につけるべきだと考え、経営コンサルティング会社で働くことを志望。帰国後に大学院を修了して、希望した会社に入社した。

「経営コンサルティング会社で働いてみて、協力隊の経験はビジネスにも生かせるということを実感しました。経営コンサルタントは、外部者としてある会社に入り、そこを変えていくのが仕事。他者を巻き込みつつ目指す方向に導くというのは、まさに協力隊。同僚のコンサルタントが『これが正論です』と言うところでも、私は協力隊でそうしていたように、相手の問題点をひたすら聞いて、どこに棘が刺さっているのかを考え、それを抜いてあげるようにしていました。そのほうが効果的で、同僚と比べても高い成果を出せました」

そして、小沼さんはかねてからの計画通り退職し、2011年5月にNPO法人「クロスフィールズ」を立ち上げた。メインの事業は留学ならぬ「留職」プログラム。これは、企業で働く人を1〜12カ月間途上国のNPOなどに派遣し、現地スタッフとともに課題解決に向けて取り組んでもらうというグローバル

NPOを立ち上げ、企業人が一定期間途上国で活動する「留職」プログラムを始動

しかし、小沼さんは次第に「旅行だけでは異文化をわかったとは言えない」と思い始めた。「議論したりケンカしたり、一緒に何かをやり遂げないと、本当の相手の文化というのは見えてこない」と考えたのだ。そこで、社会学をより深く学ぼうと進学した大学院を休学して協力隊に参加するという道を選んだ。

配属先はシリア最大のNGO。村落部における環境教育プロジェクトの一環としての派遣だったが、小沼さんの着任時点でプロジェクトは終了し、マイクロファイナンスの事業に移行していた。要請内容とは異なったものの、「配属先のためになる活動しよう」と決意。同僚や上司に教わりながら活動を始めた。

協力隊参加前はNGOやNPOのことはほとんど知らなかったという小沼さんだが、活動を通してその存在の重要性を実感。同時に、たびたび運営の非効率さを感じもしたが、「企業ではないし仕方ないか」と思っていた。その考えが覆されたのは、ドイツ人の経営コンサルタントが企業からの出向という形で幹部に就任し、配属先の組織改革プロジェクトが始まったときだ。「その新しい上司がビジネスの手法を用いて配属先の問題を次々と解決していくのを見て、ビジネススキルはNPOにも生かせるということを知りました。そして企業が、社会全体の改善を目指すNPOと交わることによって、世の中に対してより大きな影響を与えられると思ったのです」

人材の育成プログラムだ。送り出す企業にとっては、社員の成長のみならず、途上国市場のニーズを把握したり、「留職」者を介して相手国政府や企業、NPOなどとのつながりができたりといったメリットがある。この分野で先駆的なアメリカでは、いくつかのNPOを通じて年間約2000人が「留職」している。

順調に道を歩んできたように見える小沼さんだが、就職時には不安もあったという。それは「日々の業務に追われても居心地がよくなくても、起業への情熱を維持できるだろうか」というもの。そこで、小沼さんは共感する仲間たちと「コンパスポイント」というコミュニティを立ち上げた。定期的に集まって自分たちがやりたいことを確認し合ったり、起業などを実現している人を講師として招いて勉強会を行ったりするグループだ。この活動が今のNPOの基盤ともなっている。

NPOとしてはこれから本格的に始動するところだが、小沼さんの夢はふくらむ。「私は実現したい2030年の絵」を心に描いているのです。すべての人が働くことを通じて思いと情熱を体現している社会。そして、企業と行政、NPOがパートナーになって、いろいろな社会問題を解決する時代。そうなったら、日本は課題解決の先進国として世界にアピールできます。「留職」を通して、私はそういう社会を実現していきたいです」

企業とNPOの協働に可能性を感じて
経営コンサルタントを経てNPOを設立

こぬま・だいち
1982年 神奈川県生まれ。
2005年 一橋大学社会学部を卒業。同大学院社会学研究科に進学し、休学して協力隊に参加。シリアのNGOでマイクロファイナンスにかかわる活動を行い、その後、首都の環境局に所属して学校での環境教育なども行った。

2006年 帰国。マッキンゼー・アンド・カンパニーに入社。コンサルタントとして、人材育成領域を専門とし、国内外の小売・製薬業界を中心とした全社改革プロジェクトなどに携わる。

2011年 3月、NPO法人設立のために退社。5月にNPO法人「クロスフィールズ」を立ち上げ、「留職」プログラムを中心に事業を展開している。



企業の人事担当者などを対象にしたセミナーで「留職」プログラムについて紹介する小沼さん



シリアでの協力隊時代、環境教育の授業を行うために小学校を訪れた小沼さん

